

# 風土・生命の力を引き出す

(公財) 自然農法国際研究開発センター  
理事長 岩石 真嗣しんじ



日頃より当センターの活動に、ご理解とご支援をたまわり、心より感謝申し上げます。

新型コロナウイルスがネット情報のように世界に拡散し被害を及ぼしています。見えない微生物の働きは不可解ですが、コロナウイルスの遺伝子や三次元構造はすでに特定され、抗体やワクチンを含む治療薬の開発は進んでいるようです。

ただ治療薬が未完成の現段階では、被害を未然に防ぎ、正しい情報に基づいて恐怖や差別を助長しない必要十分な防疫行動が求められます。その上で、生活に応用できる、免疫力を引き出す自然農法について考えたいと思います。

## 殺生物剤から免疫力強化へ

英語では有害生物全般をペストと呼び、第一次大戦中に開発した化学兵器を伝染病予防に転用

し、殺虫・殺菌・殺鼠剤などの防除剤として、農業被害を軽減する農薬(ペステイサイド)へと発展させました。無差別に効く殺菌剤

は劇的な効果がある反面他の生物も巻き込んで周囲への影響が大きくなり、一方、選択性の薬剤は周囲の被害を抑えても標的となる病原菌が耐性を獲得しやすく、さらなる新薬が必要となりその開発が繰り返されています。水稲栽培で最も警戒すべき重要な病害の「いもち病」では、1970年代からいもち病菌の薬剤耐性が問題となり、2000年以降にも問題が再燃しました。また抵抗性品種の多くが数年でもち病菌に侵されて育種のあり方も見直されています。

一方、作物の抵抗性という視点でみると、抵抗性を誘導する薬剤には40年以上も耐性菌が出現していません。また、抵抗性が無い

もち病に弱いはずの長寿品種「コシヒカリ」は、倒伏防止や食味低下を防ぐために肥料の使用量を制限し、稲が栄養過多にならないため、稲体を栄養源とするいもち病菌の感染を防ぎます。しかも栄養を補う別の微生物と共生し免疫力を高め、作物自身の抵抗性(多くの遺伝子が関与)が発現することで、いもち病が発病しにくくなっています。

## 風土を生かす生産活動

農業は大地と大気との接触面でおこる気候や土壌の持つ生産力を使い、有用な生物(農産物)を生産する「風土産業」です。三澤勝衛(1941)の言う「風土は無価格で価値の高い自然物」を活かす、風土の法則に従い産物の価値を高める方法が必要です。手の届く農地周辺の地形連鎖―風や水の流れ―を生かし、多くの生物との共生

関係を築きながら、ほ場の土づくりに関わる生物や広食性の天敵を増やすことで、農地生態系全体としての免疫力は強化されます。そして風土の力を生かす視点にたち、生物や生産力に変換する農法を考えれば良いのです。

## 有害生物は健康の鑑

無農薬で行う総合防除(IPM = Integrated Pest Management)は、統合的な生態系の働きで個別の生物の健全性を保持する方法です。個々の病害問題も、風土や生命が持つ統合的な自然力の一部ととらえれば容易に解消できます。そう見ること、有害生物が全体の「循環・統合・共生」の健全度を映し出し、生命力を引き出す鑑(指標)にもなり得ます。この自然や風土を生かす生物防除の視点が自然農法の鍵であり、私たちの健康な暮らしの助けとなるはずで